

グローバルマインドセットとしての海外スタディツアー

— 「韓国ジョイントスタディツアー」参加者への定量・定性調査より —

荒川裕紀*

Overseas Study Tour for Fostering Global Mindsets among KOSEN Students -from Quantitative and Qualitative Surveys of the “Korea Joint Study Tour” -

ARAKAWA Hironori

ABSTRACT

This report describes the “Korea Joint Study Tour” offered mainly to first year students at Akashi KOSEN. The following three points will be clarified based on the results of surveys implemented to program participants. The first is the specific needs of “study tours” at KOSEN. The second is the change in the participants’ mindsets. The third is the most effective “study tour” approach in fostering the mindset of students. The survey results reveal that in terms of students’ reasons for participating in the program, the largest percentage wished to first of all get to know people and to make lasting friendships. After the program, they came to realize the importance of talking to each other and creating networks for their future. Furthermore, follow-ups of graduates’ reveal that many of them have again gone abroad. These results imply that the study tour had functioned as startups towards becoming global engineers. Based on these analyses, we found that the “study tour” had strong impacts on students. We believe that the study tour for first year students with the aim of fostering global mindsets and providing the experience of cooperating with foreign students abroad might be the best approach towards nurturing global engineers.

KEY WORDS: Study Tour, KOSEN, Global Mindsets, Sustainable Relations, Global Engineer

1. はじめに

韓国ジョイントスタディツアーとは、毎年3月に北九州高専と明石高専の2つの高専から各10名程度を選抜し、首都ソウル、中部の全州に滞在し、最終的に南部の釜山までを約1週間かけて縦断し、研修旅行を行うものである。対象学年は主に1年生から3年生（15歳から18歳）までとし、低学年対象のスタディツアーとしている点に特徴がある。

*一般科目

このツアーでは、韓国と日本との交流の歴史や文化を現地にて学ぶこともテーマの一部であるが、一番の目的は、北九州高専の協定校である全北大学の学生との交流を通じてのグローバルマインドセットである。後述するが、実はこの学生交流はツアー設立当初の2012年においては、主プログラムとしては考えられていなかった。しかし2013年度以降、この交流こそが主プログラムとなり、現在に至っている。

本報告者が2017年に明石高専に異動した後に、北

九州高専に韓国近代史専門の大熊智之氏が着任した。彼とともに協力し、明石高専と北九州高専の 2 校合同でのスタディツアーとして恒例化させた。現在までに、100 名近くの学生が体験したツアーである。(写真 1)

まず次項において、当スタディツアー設立の経緯について述べる。



写真 1: 2018 年度韓国ジョイントスタディツアー

2. スタディツアー設立の経緯

北九州高専と全北大学校とは、長年学術交流校協定を結ぶ間柄であったが、2010 年に改めて詳細な覚書を更新することとなり、それに則り実際の人的交流が再開されることとなった。その一環として 2011 年より催行されたのが、北九州高専の学生の全北大学校訪問プログラムであった。これは、学術交流に基づき、主に北九州高専の学生が当大学の研究室を訪問するものであった。

専門学科で習う学問が世界でどのように活かされているのかを見聞するという意味において、専門教科が多くなる高学年や専攻科にとっては学びの多いプログラムであると言えた。2012 年 3 月、その学生引率として全州を訪れた本報告者は、当時の参加者の大半が専門学科の履修がまだ少ない低学年の学生であったことから、研究室訪問以外に、学生交流などができないだろうかという要望を、韓国側のコーディネーターに相談したのである。幸運なことに、このコーディネーターであった鄭熙轍 (ジョン・ヒチョル) 氏は、前年度まで全北大学校の職員を務めており、同大学日本語研究会の OB であった。その関係から日本語や日本文化が好きな現役学生を多く知っており、2012 年のツアーにおいてもスケジュール外ではあるが、学生交流実施の話がまとまりだしたのである。特に幸運だったのは、この相談をもちかけた際の帰り際に、当時の日本語研究会の部長が「偶然」通りかかったことであった。この「出会い」によって、話が急速にまとまり、相談をした翌日には、学生同士の交流が急遽実現する運びと

なった。

この偶然は、研究室訪問でしかなかった当時のツアーに大きな変化をもたらした。引率した北九州高専の学生の表情には生気がみなぎり、韓国側の学生にとっても突然ではあったが、非常に楽しい時間を過ごすこととなったのである。わずか数時間の出会いであったにも関わらず、別れ際に北九州高専の一学生が別れを惜しみ突如泣き出すという「事件」まで起き、結果的には大成功を収めたのである。(写真 2)



写真 2: 2012 年 3 月、偶然より生まれた学生交流

この時の「偶然の成功」に動かされた北九州高専の教員は、次年度からは、学生交流を重きに置くスタディツアーを希求し、その実施に力を傾けていくこととなった。カウンターパートである全北大学校や鄭熙轍氏も同じような思いを抱き、一致協力して、2013 年 3 月からは少しずつ学生交流を重視したスタディツアーへと変容させていった。

この交流は、日本側だけではなく、全北大学校の日本語研究会の学生たちにとっても大いに刺激的だったようである。当時の学生のブログには、日韓の学生が楽しんでいる写真 (写真 3) とともに、以下のようなキャプションが添えられていた。

「아아.. 이게 벌써 어제의 일이라니. 어째서 즐거운 일은 이리도 빨리 지나가나.」(意識「ああ・・・これがすでに昨日のこととは。どうして楽しいことはこうもやく過ぎ去ってしまうのか。」)



写真3：日韓学生の交流に重きを置き始めた2013年

交流を通じて韓国のことをたくさん知りたい北九州高専の学生と、日本のことを知りたい全北大学校の学生とが出会いによって、大いに反応した瞬間が垣間見える。学生交流に大きく舵を切ったことによって、紆余曲折がありながらも、以来7年以上このツアーを続けることが出来た。2018年3月からは、先述した本報告者の明石高専への異動もあって、日本の2高専の学生と、韓国の大学生、そして相互の教員やスタッフが交わる、「互恵的なスタディツアー」となりつつある。

現在3月下旬に実施しているスタディツアーの行程は、次のようなものである。1日目に首都ソウルでの巡検、2日目からは全州入りし、工学関連施設の見学（2018年度は、韓国での国家戦略製品と位置付けられている炭素繊維の研究機関である韓国炭素融合技術院を訪問）、大学・研究室訪問。講義（写真4）や留学生との交流も実施。4日間を全州で過ごし、第二の都市釜山に南下し、巡検後に帰国している。



写真4：日本語学科の講義にて発表（2018年3月）

この7年間で、受け身のツアーにならないように、様々な教育学的手法も採り入れていった。一時、リピーターの参加者が増加したこともあり、2016年には、数度参加した学生対象に「アドバンスコース」と銘打って、全北大学校や同じく国立の全州教育大学校の学生たちと、マインドマップ作りなどのアクティブラーニングの手法を用いて、社会問題を討論する問題探究型プログラムの導入にも踏み切った（写真5）。



写真5：2016年アドバンスコース（於全州教育大学校）

このアクティブラーニング導入を加えたアドバンスコースの催行に関しては、教育的な効果も認められたために、これを契機として、3月のスタディツアー自体も少しずつPBL（Project Based Learning）的な要素を含めることとなっていった。

2019年3月のツアーでは工学系の教育でよく用いられる「アイデアソン（ideathon）」を導入し、ほぼ徹夜で日韓の学生が課題に取り組むプログラムも導入し、より密接な時間を双方が過ごすことに繋がった。更なる交流につながるこのアイデアソンの詳細については、後述したい。

3. 当論考で明らかにしたい問題

明石高専、北九州高専の双方にも、「語学力向上を主とした海外研修」や「技能習熟を主とした海外研修」は存在する。その中で、このツアーは、「低学年向け」で、「語学習熟の場も存在するが、人間同士の付き合いや文化や社会体験を重点とする」ことが特性である。一見すると、目的の訴求力が他のツアーに比べて弱い。

しかし興味深いことに、このスタディツアーは学生たちにとって、低学年を中心に人気が高いのである。特筆すべきはこのツアーを起点として「もっと世界に出る学生」が多数生まれている現実がある。

当論考において明らかにしたい問題は、①「学生たちは、この交流中心の短期間のスタディツアーにおいて何を学び、どのような気づきをしているのか」②「彼らのキャリアプランニングにどのように寄与しているのか」である。

現在、日本の国際理解教育では、現地で社会問題や歴史に触れ、現地の人々と交流する教育旅行の形態を「スタディツアー」と呼称することが一般的となっている。教育学的研究の潮流としては、①これらのツアーを通じて参加者がいかに変容したのかを調査・分析する、②ツアーの対象となった地域がどのように変容したのかを分析する、③これらのツアーを学校の履

修単位に加える場合にどのような評価を与えるのかを考察する、という 3 点がある。

上記に鑑みて、当論考に関して本報告者は、①「学生における変容や、学生から見たこのツアーの利点・ニーズ」を諸調査から分析した。

特に、上記で挙げた、「なぜこのツアーが両校で人気があり、このツアーの経験者が更なる世界への歩みを進めるのか」に関して、諸調査手法を実施した上で、考察を行った。

加速度的にグローバル化が進む現在、日本の高等教育の中においては、多様な文化を受容し、知識・技術を創造的に活用できるグローバル人材の育成、グローバルコンピテンシーの涵養が期待されるようになってきている。工学系大学でもその動きは非常に盛んであり、例えば南日本に位置する工学系大学では、前記の能力を持った工学者を「グローバルエンジニア」と規定し、その養成を前面に押し出した教育改革、留学生の受け入れ、そして海外協定校への学生派遣に力を入れている(加藤 2019)。しかし、「グローバル人材」の語自体に対する批判言説もあり、その教授法は、まだ確立されているとは言えず、諸大学・高専・高校では諸言説や取組の考察が行われ始めた過程にある。

本報告者は、当論考を通じて一事例としての当スタディツアーの紹介にとどまるのではなく、調査・分析によって明らかとなった諸結果をグローバルエンジニア教育全体の文脈の中で主張したいと考える。それによって、諸高専や各工業系学校における海外研修を実施する上での指針となり得る言説・方法論を本報告者なりに提示したい。グローバルエンジニアの育成、それに繋がるマインドセットを教育課程の中でいかに学生たちに行わせるかという喫緊の課題に対してのスタディツアー実施者からの提言としたい。

Mansour Javidan らは、“The Global Mindset”(2007) などの研究において、グローバル人材になるためのグローバルマインドセットに関して、(1) 知的資本(国際ビジネスに関する知識や学習能力)、(2) 心理的資本(人脈を築き、異文化への寛容さと変化への順応力)そして、(3) 社会的資本(人々を束ね、文化的伝統や職業上のバックグラウンド、政治的見解が異なるステークホルダーに影響を与える能力)の 3 つの要素が重要であるとしている。

この 3 つを細分化すると、(1) 知的資本に関しては、①グローバルビジネスの理解、②複雑性の認知、③コスモポリタンの思考の 3 要素、(2) 心理的資本に関しては、①多様性への情熱、②冒険心、③自信の 3 要

素、そして(3) 社会的資本に関しては、①異文化への共感、②対人影響力、③外交的手腕の 3 要素であると定義している。

低学年対象の当ツアーの場合では、どの要素が涵養できたのかについて考察する。その結果を踏まえ、当プログラムがいかにグローバルマインドセットに寄与してきたのかを明らかにしたい。

4. 調査手法

調査手法としては、以下の 3 点である。

1 つ目は、定量調査である。2018 年・2019 年に参加した約 50 名を対象として、ウェブベースでのアンケート調査を実施した。母数が少ないため、属性と動機・感想のクロス検定は実施しなかったものの、自由記述欄を多く増やしたことによって、彼らがどういったスタディツアーを特に望んでいるのかを明らかにした。

2 つ目は、定性調査である。具体的には、これまでに参加した北九州高専学生へのインタビューと、2019 年 7 月中旬に明石高専で行った参加者(明石高専・全北大学校)の振り返りで出された意見からの分析、そして参加者がツアー参加中とその直後に書き込んだブログの文章からの分析である。この分析により、定量調査の結果が補強されるとともに、更に詳細な低学年向けのスタディツアーのニーズや彼らの気づきへと導くことが出来た。

3 つ目は、このツアーを経験した学生が、具体的にどのような社会的な成長を遂げたのかという、数事例のトレースを行った。このトレースによって、グローバルマインドセットとしてのスタディツアーの在り方についての考察に繋げることが出来た。

5. 調査結果

5.1 定量調査

2019 年の参加者 17 名中、14 名が回答。2018 年の参加者 35 名中、20 名が回答した。

質問項目は、属性の他、参加動機、渡航前の韓国に対するイメージ、渡航後の韓国に対するイメージの変化、各プログラムの満足度、スタディツアーを経て自らの変化の気づき、改善点、そしてこのツアーを経験することによって、どのような学生生活や将来を歩みたいかに関するものである。

①「参加動機に関して」

5 点法を用いて、諸項目に対する質問を行った。特に「強く思う」「そう思う」に集中して回答した項

目としては、「まずは海外に出てみたかった」であった。2018年は「強くそう思う」14名、「そう思う」が5名、「どちらともいえない」が1名という結果となり、2019年は「強くそう思う」が12名、「そう思う」が2名という結果であった。

その他、高い賛成を示した項目は、「韓国の伝統的な文化に触れたかった」(2018年70%、2019年92.9%)、「本場の韓国料理が食べたかった」(2018年70%、2019年92.9%)などがあり、韓国の文化に対する興味が参加動機になっていることが分かる。

2019年の回答では、「韓国で友人を作りたいかった」(92.8%)、「違う国の若者と意見交換したいかった」(92.8%)に顕著な賛成を示している。

②韓国に対する渡航前のイメージ

①の回答結果にも関わらず、渡航前の韓国に対するイメージは、自由回答項目からは、2018・2019年とも「反日の人が多そう」「日本と仲が悪い」「途上国」など、総じてあまり良い印象を持ってないことが窺えた。少数の回答者、特にK-Popなどの韓国大衆文化に興味のある学生から、多少好意的な意見がみられる程度であった。

③「実際渡航してみて」の変容

②の結果は良いイメージが少なかったが、渡航後、そのイメージは一変している。2018年は85%が「イメージが大きく変わった(8名)・変わった(9名)」と回答、2019年は92.5%が同様に回答(各6名・7名)した。実際に経験・見聞することによって、イメージの変容があったと言える。

自由論述形式の質問では、2018年度参加者は、「日本が大好きな学生が多かった」「優しい人が多かった」「人情を感じた」「歴史的な問題と同時に考え方が似ていて親近感がとても沸いた」と回答した。

2019年の回答においては、「大いに発展している国であった」「日本人に友好的な韓国人の友人をたくさん作れた」と好意的なものばかりであった。

2019年の中で、本報告者が特に挙げたい自由回答は次のものである。

「確かにそこには政治的なものが生む心のキョリがあった。しかしそれは報道されてきた事のほんの一部にしかすぎず、それを全てとして捉えてしまっている自分がいることに気付かされた。両国の壁を乗り越えようと、異文化を受け入れようとする人たち

の暖かさに触れることができ、自身の大きな成長になったと思う。」

現地で実際に人の暖かさに触れ、画一的な情報ではなく、多様性があることを確認した時、各人の持つステレオタイプは打破される。感覚が鋭い十代であればなお、その衝撃は大きいに違いない。それを成長として捉えられる柔軟さが、本学生にはある。国内外でこのような体験ができることこそ、グローバルエンジニアとして成長する段階では必須なのではないだろうか。

④どのようなプログラムが効果的なのか

ソウル・釜山・全州でのエクスカージョン、学生交流など様々なプログラムを実施したが、各年度において人気があったのは、

「学生大使による図書館訪問(2019年そう思う71.4%・強く思う28.6%)」

「全北大学留学生との交流会(2019年強く思う71.4%、そう思う21.4%)」

「全北大学学生との食事会(2019年強く思う92.8%、そう思う7.1%・2018年強く思う70%、そう思うが20%)」

「日本語研究会との交流会(2019年強く思う85.7%、そう思う14.3%、2018年強く思う70%、そう思う10%)」

などである。90パーセント以上の満足度を示している活動の全てが、現地の人と関わるプログラムであった。

先述の通り、2019年度は、工学教育で多用されるアイディアソンを導入した。テーマは、「全州市は韓国国内では観光都市として有名であるが、海外から観光客をたくさん呼ぶためにいかなる工夫をすべきであるか」というものであった。

明石・北九州・全北の学生混成でチームを作り、1日目は全州市の観光の現状を把握するため、チーム毎に全州市内を実際に廻った。(写真6)

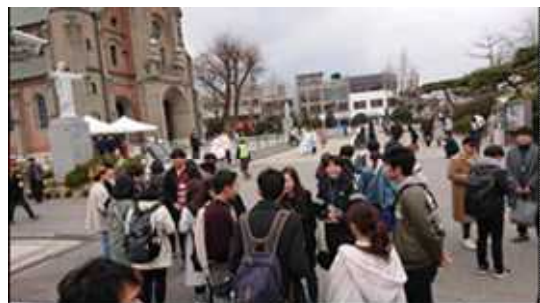


写真6：2019年実施の全州市内アイディアソン

その後ミーティングを実施し、この都市にどのような需要と可能性があり、どのように工夫することによって更なる活性化が見込めるのかを提案させた。



写真7: 各班のアイデアソンの発表(2019年3月)

言語的な障害があるものの、各チームで食事をとり、いくつかの班は宿舎にしている韓屋村の民宿に戻って、韓国学生とともに徹夜でプレゼンテーション資料を作った。こうして、きわめて短期間のうちにチームビルディングをし、3校の学生協働で活動し、全州最終日のプレゼンテーションに臨んだのである。(写真7)

この班別活動の評価は、「とても良かった」が78.6%、「良かった」が21.4%と、90%近くの学生たちの評価が高いことが明らかになった。

⑤ これからの将来どのように活かしていくのか

「スタディツアーを経て自身が大いに变化した」と答えたのが、2019年は57.1%、「变化した」と答えたのが42.9%であった。

2018年は「大いに变化した」との回答が35%、「变化した」と回答したのが65%と。どちらの年度でも、100%に近い高い数字となった。スタディツアーに参加することによって、自らが变化したことをここまで高い比率で自覚しているという、非常に興味深い結果となった。全体的な感想や、将来に向けての展望では様々な自由回答が寄せられたが、ここでは、変容に関する特に顕著な事例を2つ挙げたい。

「文化の違いがあったとしても根本的な相手に親切にしたり喜んでもらいたいと思ったりする気持ちは同じであると気づき、これから自分と全く異なる考えや文化を持つ人と関わることがあるとしても変に恐れることなく接していきたい。」

低学年にて飛び出したことで、異文化への感覚が新鮮である。同時に異文化に身を置いたことによって、自

分自身の環境についての気づきが起きている。

「たくさんの人に出会い、新しい世界に触れる事で、今まで知らなかった新しい自分の一面を知ることができた。私はまだ本当の私を知らないことに気付かされた。まだまだナニモノにだってなることができるのだと実感できた。」

この記述から感じられることは、グローバルマインドセットの3要素のうち、(2) 心理的資本(自信) (3) 社会的資本(異文化への共感)の涵養に繋がっていることである。

5.2 定性調査

定性調査においては、参加者へのインタビューと、7月に全北大学の日本語研究会の学生が明石高専を訪問したことによって可能となった振り返り会、そしてスタディツアー中あるいは直後に参加者が記した「留学ブログ」を中心に、質的な調査と分析を行った。

同時に、これまでの7年間の参加学生の進路先やその後の留学に関して、私の知りうる限りでトレースを行い、その提示も試みている。

なお、①のL君の事例に関しては、北九州高専一般科目の大熊智之氏にインタビューを行っていただき、そのインタビュー内容を文字化したものである。

① L君の事例

L君(2年生)は、もともと海外志向が強い学生である。国籍が韓国であり、中等教育まで民族学校に通っていた。そのため、韓国語が不自由なく話せる。将来的には英語圏への留学も視野に入れており、1年次において海外での英語研修に参加した、積極的な学生である。その彼が、スタディツアーに参加したことによって、いかに変容したのか。「言語・コミュニケーション」に関する気づきと「積極性」に関する語りを提示し、考察する。

「言葉が通じるコミュニケーションの楽しさ

以前に経験した海外での英語研修のときよりも何倍も楽しかった。その理由は、言語に不自由しなかったからである。韓国人学生は日本語が話せ、自分は韓国語が話せるため、言語的な苦労はなかった。言葉が通じると国際交流がこんなにも楽しいのかという発見があった。海外の学生と話すことの楽しさを知ったことで、①いまでは世界一周をしたいと思

うくらい海外どこにでも行ってみたいと思うほど海外志向が高まった。また②国際交流を楽しむために言語の重要性が分かったことで、英語をもっと勉強したいと思った。」



写真 8 : 「共食」で明石・北九州・全北の学生が交流

韓国・朝鮮語によるイメージ教育を日本にて受けるという環境にいたことも大きいですが、言語が通じる環境に身を置いた(写真 8)ことによって、更なる海外体験をしたいという気持ちが強く表れるのは、他学生においても同様であった。その上、海外に出るために、言語的な障壁を自らで取り払わなければならないとこの年代で考えることが出来ているのは、注目すべきであろう。

「プレゼンテーションの成功体験

以前の海外プログラムでも発表する機会があったが、自分は他の人にまかせることしかできなかった。スタディツアーで学生を前に行った 2 回のプレゼンテーションがうまくいったことで自信を得た。出発前に、1 年生に向けて海外留学経験を発表してほしいという依頼を受けていたがそのときは引き受けるか迷った。スタディツアーでのプレゼンを経験したことで、帰国後に再度依頼を受けたときは、こころよくやろうと思った。実際に 1 年生 200 人の前で発表してうまくできた。」

帰国後の経験が含まれているが、当プログラムでは、自らの意見を発表する場も多く設けている。それもドメスティックではなく、インターナショナルな場である。このツアーでの成功体験が、その先の自らを創っていく際の自信に繋がっていることが感じられる。

②日韓学生の振り返り会から

日韓の振り返り会の中では、アンケートの項目と重複するものがあるが、韓国側の感想として、「日本の学

生に韓国のことを直接伝えられたのは大きかった」「地域の再発見がプログラムによって出来た」「散策や食事の時に多くの他愛ない話が出来たこと、そこから友情が生まれた」とする意見があった。

日本側からは「初めての海外研修であったが、人との出会いによって偏見がなくなり、更に新しい世界に飛び出していこうという積極性が出た」との意見や、「(ただ受け身として学ぶのではなく)、能動的に実践的な活動をするところこそが必要と感じた」との意見があった。

目的を明確に定めるのではなく、まずは「共食」し、スモールトークを続ける中で、友情を育むこと、人間と人間が触れて、そこの中でお互いの将来を語り合える場を主催者側が用意することが必要であると感じた。

② ブログ中の文章から

「留学ブログ」は、明石高専から派遣された海外派遣参加者が、各ツアー中に各参加者が交代で更新するものと定められているものである。「韓国スタディツアーブログ」の中にも、学生たちの様々な気づきが多数存在している。ここでは、3つを紹介したい。

「私は今回の留学の様々なプログラムを通して、新しい“ジブン”も見つけました。私ってこうなんだよね、私はきつこう、と思っていたことを覆す経験を沢山できました。私の知らない、私、をたくさん見つけました。こんなにも 1 つのことに熱くなれる自分がいたこと。積極的に挑戦できる自分がいたこと。学んでいる専門が大好きな自分がいたこと。何より、新しい自分を見つけよう、と思える自分がいたこと。全てこの留学に参加したからこそ、参加しなければ経験できなかったことです。」(2019 年)

プログラムに参加したことによって、自らの専門性を伴った将来の役割に気付いた。事実、この学生はツアー参加後、「トビタテ留学 JAPAN」派遣学生に選出され、防災に関する専門教育を深めるために、インドネシアの大学に 3 週間留学しフィールドワークを行った。結果としては、社会的資本の拡大に寄与する、国内的・国際的な人脈を築くことにも繋がったのである。

「この研修に参加して最も良かったことは、明石はもちろん北九州、そして全北大学の学生と仲良くなれたことです。僕は今回の研修の参加者の中に知り合いがいませんでした。しかし、今になって思うと

一人で参加して良かったです。それは、僕はコミュニケーション能力が高い方ではないので、きっと友達と一緒に参加していたら、友達以外の人と交流しようとしていなかったと思うからです。」(2019 年)

高専におけるコミュニケーション能力の涵養の必要性が叫ばれて久しいが、彼は飛び出したことで、図らずとも、そうせざるを得ない環境に置かれた。そのことによって、交流の必要性を感じる事が出来た。

「チョンジウの屋台でアイスを買ったとき。英語で『韓国語は話せません、私は日本人です』と伝えると、店員さんは驚いたようにうなずき、スマートフォンを他の店員といじり始めた。すると、アイスを手渡ししながら日本語で『ありがとうございます』とってくれたのだ。もしかすると、すべての外国人にしているのかも知れない。けれど、私はその心遣いに『日本と韓国は仲良くやっつけていける』という確信を抱いた。涙が出た。」(2018 年)

かつてないほど、日韓関係の難しさが現在語られている。これまでも、興味がありながら身構えて参加した学生も一定数いた。この参加者は、韓国で得た、日常での優しさに涙したと言う。国際と「民際」が併存する。多様性をいかに体感し、その後の将来に繋げていくのか。その学びの場をも提供していることとなる。

5.3 トレース調査

これまで、本報告者は 7 年以上のこのツアーを実施して来たが、このツアーを経験した後、続けて海外に行く学生は非常に多い。

この体験ののちに、5 年までの在学中に、1 年間留学した者 2 名(ドイツ・アメリカ)、トビタテ留学 JAPAN 奨学生に選ばれた者 3 名、その他奨学金にての海外派遣 1 名、短期留学では 20 名以上が海外に飛び出した。特にアメリカに 1 年間行った学生は、このツアーに 1 年生の時に参加した。そこで海外へ行くことの素晴らしさに魅了され、気持ちを抑えきれず、民宿にて私と留学について夜をかけて話し合ったのである。ここを起点として、彼は 4 年次にトビタテ留学 JAPAN に選ばれ、アメリカ・イリノイ州のコミュニティーカレッジに 1 年留学した。帰国した現在、日本の国立大学に編入して、化学を専攻している。

この学生のように、低学年で海外体験の大切さ、素晴らしさを経験し、次の長期・短期留学に繋がった学生

は多い。ここからも、当ツアーがグローバルマインドセットとしての機能を持ち併せていると考えられる。

6. 考察

なぜこのスタディツアーが、多くの学生を魅了し、それをゴールとせず、次につながり、結果的にグローバルエンジニアへの布石となっているのか。それは、以下の 3 点があるからだと考えられる。

(1) 低学年だからこそその学びの多さ

15 歳程度という「若さ」は大いに関係する。若ければ若いほど、海外に出ることによって多くの刺激があるだろう。しかし、普通ならば、その渡航には言語的な障壁が多分に伴う。例外的にこのプログラムについては、日本語を学ぶ日本文化に興味のある学生と交わらせることによって、言語障壁が解消されている。初海外での成功体験が、次につながっている。

(2) 体験の質の違い

語学を学ぶ、技術を学ぶ交流も大切である。しかし、この交流は、まず人間と人間とが密に交わる交流となっている。コミュニケーションが苦手な学生も、その中に放り込ませることによって、必然的に変わらざるを得ない環境を作り出し、その結果、自信を生み出している。

(3) 高専だからできるマインドセット

ここで見落としてはならないのは、高専における教育可能な年数である。5 年間(または 7 年間)の長期間、同じ学校内でトレースと長期に渡るアドバイスが可能なのである。このような教育機関は、日本においては類を見ない。この長期間教育可能という利点は、長期留学を果たし、グローバルエンジニアとして成長している学生の事例を見れば明らかである。このような「継続性を持ったグローバル教育が可能」だからこそ、特に低学年で学生たちの興味の喚起を促すようなスタディツアーの設定が必要なのである。

前述の Mansour Javidan らによるグローバルマインドセットの 3 要素の中で、どの要素の涵養に繋がっていたのかを考えると、(1) 知的資本に関しては、現地施設の見学・伝統文化体験、事前学習等によって、特に③のコスモポリタンの思考(世界各地の文化、歴史、地理、政治・経済に対する強い関心)の涵養に繋がっていたと言える。

(2) の心理的資本に関しては、学生同士の交流を中心に①多様性への情熱(世界の探索、異文化体験、新しい方法の導入に対する強い選好)を喚起し、②冒険心(予測不能で複雑な環境を歓迎し、そのなかで生き

抜く能力)を用いる機会を創出することによって、ツアー後における、諸参加者の③自信(自己信頼性、ユーモアのセンス、新しい状況のなかでリスクを取る勇氣)を生み出している。つまり、3要素すべての涵養に繋がっていると考えられる。2013年以降、重きを置きた学生間交流が特に奏功したと考えられる。

(3) 社会的資本に関しては、①異文化への共感、②対人影響力、③外交的手腕の3要素の涵養に関しては、アイディアソンの実施や、2016年度のアドバンスコースに実施された、マインドマップ作製などアクティブラーニングの手法を用いたプログラムが有効であったと言える。

以上、グローバルマインド言説に当スタディツアー参加者への定量・定性・トレース調査の結果を当てはめてみると、長年実施し続けてきたスタディツアーでの諸プログラムが、学生たちのグローバルマインドに大いに繋がっていることが明らかとなった。

7. 結論「低学年でどのような海外体験学習が必要か」

これまで個別の事例を挙げていったが、この中には、グローバルに資する汎用可能なメッセージが多く込められている。前項の考察から明らかにしたことを踏まえ、低学年においてグローバルマインドセットを主眼に置いたスタディツアーを催行する際には、以下の3点が必要ではないだろうか。

① まずは自信を付けさせる

語学的バリア・経済的バリアを極力取り除いたツアーの提供が必要である。主催者としては、実施するフィールドを見つけるのと同時に、各種財団や旅行社との交渉等、教育コーディネーターとしての役割も担う必要がある。

② 自ら学び続ける意欲を湧かせる

やはり、人に出会わせることが重要である。興味のある同士を、ツアー実行者が結び付けてあげること、文化圏を越えた人との出会いを若いころに経験させることこそが、スタディツアー催行者の使命である。

③ 課題を見つけ出し、協力して働かせる

アイディアソンは非常に有効に働いた。チームとして一心に働く経験、成功体験を早い段階で行わせること、そのことによって、国境・国籍を越える経験を知らずと実行し、自らの将来についての役割・使命を考察する機会へと繋げることができる。

これらの実行には、もちろん地域的な特性や社会環境に左右される面は大いにあるだろう。しかし、主催者がただ引率するのではなく、ステークホルダーやカ

ウンターパートとの積極的な交流、更に言うならば人間的な交歓が教育的な結果に影響する。実行者のお互いが、信頼関係に結ばれているか否かを学生たちは機敏に感じ取っている。例えば、2018年にリーダーだった学生は、以下のコメントを残している。

「国境を超えて人は深い絆で繋がることができる…荒川先生とジョン・ヒチョル先生のように、ご縁を大切にし、共に活動できるような、お互いを高め合える関係が築ければ、いずれその輪は拡がり、国どうしの仲も徐々にほぐれてゆくのかかもしれません。」

これから先、多くの学校において、グローバルマインドセットが行われる低学年対象のスタディツアーが開催されることを願ってやまない。

8. 残された課題

課題としては、北九州時代の参加者のトレースがまだまだ不完全であったことである。このスタディツアー参加者の同窓会組織化は、長期間教育が可能な高専の強みとなるはずである。定量調査も継続して実施することによって、回答数を増やし、より正確なデータ収集とその分析に努める必要がある。

マインドセット言説に関しては、より最新の言説研究の必要性がある。考察が始まったばかりの分野でもあり、次回以降、積極的に調査を行いたい。現在、当プログラムは単位化されていないが、将来的に単位化される際には、評価に繋がるルーブリックづくりが必須となるであろう。今回の論考では、マインドセットに関する諸要素の提示のみを行った。各学生のグローバルマインドセットに関して、プログラム中での到達目標、事後のレベル設定などに関しては次回以降の論考にて、諸言説を提示した上で改めて考察したい。

9. 謝辞

このツアーの創設にあたって、まず北九州高専名誉教授、赤毛勇氏が全北大学校と提携を結ばれたことが、大きい。それをより現代的な交流へと推進された塚本寛前校長、大谷浩先生、安部力先生等のご尽力によって現在へと繋がっている。韓国側では、全北大学校の諸先生方、国際交流部、そして、大きな契機を作った鄭熙轍氏、安炫俊氏には、本当にお世話になっている。

現在、北九州高専側でツアー企画をされている大熊智之先生や小清水孝夫先生をはじめとした皆さまには、調査協力もいただいた。転任した明石高専においても、

ツアー催行にご理解いただいている。全ての方々に対し、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

もちろん、全北大学校、北九州・明石の両高専の参加学生たちがいたからこそ、現在までツアーが継続し、発展できたわけである。感謝と共に、彼らのグローバルエンジニアとしての更なる成長を切に願っている。

参考文献

- 1) 今里拓哉：“人材育成におけるスタディツアーの役割”、平成 18 年度 NGO 専門調査員調査報告書、外務省 (2006)
- 2) 風巻浩：“「幸せを分かち合う」ための国際協力と学校 -スタディツアーモデルの学習を-”、開発教育第 52 号、70-73 頁 (2005)
- 3) 野中春樹：“参加体験型・問題提起型学習における教員の役割 -サラワク・スタディーツアーの実践を通して”、国際理解教育第 13 号、80-98 頁 (2007)
- 4) Mansour Javidan, Richard M. Steers, Michael A. Hitt: “The Global Mindset” (JAI Press, 2007)
- 5) 加藤鈴子：“グローバル人材像と目指すべき人物像の狭間で”、九州工業大学教養教育院紀要第 3 号、57-72 頁 (2019)